

樹木・花にまつわる物語

第3回 アンズ 杏

河本義宣

アンズは中国名「杏」で原産地は中国東北部。日本への渡来は定かではありませんが、万葉集には「杏人」の表記があり、カラモモ、カラヒト、モモサネなどと読まれています。平安時代には種子が薬用に用いられていました。学名は *Prunus armeniaca*。Purnusはサクラ属でスモモ、ウメ、アーモンドなどが仲間で、英名はアプリコット。果実は食用、「神農本草経」で種子を杏核仁といい、主治は、治咳逆、上気、雷鳴、喉痺、下気、金創、寒心、賁豚として中品ちゅうほんに収録されており、日本では咳止め・カゼの予防の生薬「杏仁」として日本薬局方に収録されます。

アンズの林・「杏林」は、中国医学(中医)の別称として用いられ、日本では大学や製薬会社の名前に使われていますが、以下の故事に拠ります。

三国時代、呉の国に董奉という医者が居ました。ある時、役人が重病になり、何人かの医者にかかりましたがよくなりません。董奉が診ることになり、丸薬を3つ飲ませました。患者はすぐに意識を取り戻し、数日のうちに元気になりました。このことが評判となり、大勢の患者が来診するようになりました。

董奉は身分の分け隔てなく患者を診察・治療し、金持ちからはそれなりの治療費をもらいましたが、貧乏人からは治療費を貰いませんでした。その代わりに、用意してあるアンズの木を庭に植えてもらいました。年経ずして大きくなったアンズの林か



川崎市にて2018年3月、筆者友人撮影



アンズの実(「GATAG」フリー写真素材集)から

らは、沢山の実と種子が採れるようになり、^み実^みは食べ物として困っている人に分け与え、種子は薬として使いました。

後世、人々はアンズの林を見るとすぐに董奉の優れた医術と高尚な遺徳を思い出して「杏林」を中医の別称に使うようになりました。日本でもこの故事に倣って医療に関わる場所に「杏林」を使うようになりました。この故事を四字熟語で「杏林佳話」いい、医術に優れた医者を「杏林高手」と呼ぶようになりました。

ほぼ同時代に華陀かだという医者が居ました。関羽が魏の曹仁と戦って毒矢(トリカブトの毒)が当たった肘の骨の中から毒を取り出す手術をしたことが三国志に出て来ます。華陀は麻酔薬が処方出来、関羽に勧めますが、これを断り、碁を打ちながら手術を受けたと記されています。その後、曹操の頭の治療にも関与します。曹操は頭痛持ちでした。華陀を呼んで診察を受けたところ、頭痛の原因は「風涎(脳腫瘍)」を患っているからだを診察し、開頭して、腫瘍摘出を勧めます。「病気の治療に頭を開くなど聞いたことが無い。関羽と親しいお前は私を殺す気か」と投獄し、拷問にかけて殺してしまいます。

華陀は外科医の名医と知られており、医学部医史の講義にも必ず登場するそうです。

■今月号は、筆者のパソコンが壊れて、写真が取り出せなくなりました。従いましてネットから拝借しました。